

審査講評

日本ストックホルム青少年水大賞審査部会長 千賀裕太郎

賞の概要と応募状況：

「日本ストックホルム青少年水大賞」は、20歳以下の高校・高等専門学校の生徒または生徒の団体による水環境に関する調査研究活動および調査研究にもとづいた実践的活動を表彰するもので、その受賞者は毎年夏にストックホルムで開催される国際コンテストに日本代表として参加することになります。2005年に日本代表に選出された北海道札幌拓北高等学校は、「沼地の富栄養化による植生の遷移とトンボ相の変化—人為的に造られた自然の多様性を維持するために」と題して25ヶ国からの代表に混じって堂々と研究成果を発表し、審査員の高い評価を得ましたが、惜しくも受賞を逃しました。

本年は、全国から10校13件（北海道1件、関東4件、近畿5件、中国1件、四国1件、九州・沖縄1件）の応募がありました。いずれも高校生らしい身近な水環境・水資源を対象にした力作ぞろいの自主研究でした。なお本年から審査をより充実させるため、書類審査を通過した上位の高校に対して面接審査を行って最終受賞候補を決定することとしました。

審査経緯：

審査は5人からなる審査部会において、第一次審査（書面）、第二次審査（面接）にわたり、ストックホルム・ジュニア・ウォータープライズの国際コンテストの審査基準に従って、厳正に行われました。第一次審査は、審査員が書面での事前採点結果をもとに協議し、二次審査の対象とする3校（埼玉県立松山高等学校、京都府立桂高等学校、愛媛県立伊予農業高等学校）を選抜しました。第二次審査では、パワーポイントでの発表が円滑になされるか心配しましたが、3校とも自らの活動を効果的にアピールするとともに、審査員からの質問にも的確に答え、応募者のレベルの高さを実感させられました。審査部会は以上の結果をもとに慎重に協議して授賞候補（大賞および審査部会特別賞）を選考し、これをもとに日本水大賞委員会において授賞が最終決定されたものです。

審査結果：

日本ストックホルム青少年水大賞に輝いたのは京都府立桂高等学校の「小さな“CASE”の大きな可能性—究極の水循環で90億人の食を守る」です。同校草花クラブは世界最小のアジサイ品種を作出して農林水産省に品種登録するとともに、苗を障害者施設と共同栽培・出荷する「学・福・産」連携システムを構築しました。そして障害者にも可能なシンプルな挿し木苗栽培法として、19世紀に世界でプラントハンター達が船舶での植物長期間輸送器として用いていた「ウォード箱」を、工夫を重ねて栽培容器に改良し、密閉して無灌水の状態で長期間栽培を続けることに成功しました。今後はこの桂版ウォード箱である「Katsura Nursery Case」を用いた超節水型栽培法を稲などの穀物生産にも適用し、水不足で困っている世界の多くの地域での食糧生産に役立てたいとしています。審査員一同、ストックホルムでの健闘を心から期待するものです。

また、審査部会特別賞を次の2校に授与することとしました。埼玉県立松山高等学校生物部は、都市近郊地域の3面コンクリート張りの水路であっても、条件によってはサンショウウオが生息できることを豊富な現場調査によって実証しました。都市化が進行している地域でも、自然生態系の修復・保全の努力が無駄にはならないことを訴えました。問題解決型の優れた研究活動として更なる発展が期待されます。愛媛県立伊予農業高等学校伊予農絶滅危惧海浜植物群保全プロジェクトチームは、塩屋海岸において固有植物種の絶滅が進行している現状を自ら詳細に調査するとともに、産・官・学・民の地域連携をコーディネートしてその要因を解明し、絶滅種の保全や蘇生の可能性を訴えました。地域での自然保全運動の中核となる地道な研究活動の更なる発展が期待されます。

最後に、今回受賞された高校の皆さんにはもちろんのこと、惜しくも受賞にいたらなかった他の高校についても、大変熱心な研究活動を行った生徒の皆さん、そして熱心にご指導された教員の皆様に、審査部会委員一同より、心からの敬意を表明して審査講評といたします。